日本仏教史９－平安仏教３　真言密教－

１、空海

空海像

空海（774-835）[1]の父は讃岐の豪族である佐伯直田公である。母は畿内で勢力を持っていた阿刀氏[2]の出身で、伯父は桓武天皇の皇子伊予親王[3]の侍講[4]を勤めた阿刀大足であった。１５歳で都に上ると[5]阿刀大足の下で儒学の基礎を学び、１８歳からは大学寮の明経科に勤めている。しかし、その数年後、一人の沙門[6]に出会い「虚空蔵求聞持の法[7]」を授かったことから、大学寮を辞めて紀伊半島や四国の山々をめぐる山林修行に入っている。その理由を 24 歳の時に書いた『三教指帰』に「朝市の栄華は念々にこれを厭い、巖藪の煙霞は日夕にこれを飢る」と記している。延暦 22 年（803）最澄らを乗せた遣唐使船が嵐に会い、多くの死者をだし頓挫した。これにより留学生に欠員が出たため、急遽空海が選ばれたと思われる。遣唐使船出港の 2 か月前に、31 歳で出家得度すると、その 2 日後に東大寺で授戒し官度僧となり、延暦 23 年（804）に最澄と同じ船団で唐に渡る。この時のことを空海は「空海、才能聞こえず、言行取ること無し。但、雪中に肱を枕とし、雲峰に菜を喫うことのみを知る。時に人の乏しきに逢って留学の末に筵なれり。限るに二十年を以てし、尋ぬるに一乗を以てす。任重く人弱くして夙夜に陰を惜しむ」と述べている。

密教を学ぶために長安に入ると、青龍寺の恵果阿闍梨の下で３か月の間に３回の灌頂[8]を受けている。6 月の胎蔵曼荼羅での投華得仏と、7 月の金剛界曼荼羅での投華得仏で、いずれも大日如来の像に華が落ちたことから、大日如来の別名である「遍照金剛」が空海の阿闍梨名となる。還学生であった最澄とは異なり、留学生の空海は２０年以上そのまま唐で学ぶはずであったが、２年足らずで朝廷の許可を得ず帰国してしまう（806）。このため、九州から京へ戻る許可がなかなか下りなかったよう

高尾山神護寺

---

1 、空海の幼名を真魚としている文献は、江戸時代以降のものであることから信憑性は低い。
2 、安斗氏・安刀氏・安都氏・迹氏ともいう。物部氏と同祖伝承を有する古代氏族。
3 、桓武天皇の第３皇子。平城天皇に対する謀反の罪により母とともに幽閉され自殺した。
4 、天皇、皇太子、親王に四書五経などを講義する役職。侍読（じとう、じどく）ともいう。
5 、父方の讃岐ではなく、母方の阿刀氏の住んでいた畿内で成長したともいわれている。
6 、近年『釈摩訶衍論』を請来した戒明ではないかとされている。
7 、虚空蔵菩薩を本尊として修する記憶力を増大するための修法。
8 、6 月に『大日経』の伝授、7 月に『金剛頂経』の伝授、8 月に正統後継者承認のための灌頂。

で、ようやく大同4年（809）に嵯峨天皇が即位すると帰京が命じられ高尾山寺の僧となる。弘仁元年（810）に、空海は朝廷に『仁王般若経』『守護国界主陀羅尼経』『仏母大孔雀明王経』等の護国経典があることを告げると高尾山寺において修法を行ずることを上表した。これにより、弘仁2年（811）に嵯峨天皇は早良親王[9]が幽閉されていた乙訓寺に空海を移住させ、その怨霊を鎮める任に当たらせている。この時、最澄は乙訓寺に空海を訪れ、翌年には空海から高尾山寺で金剛界と胎蔵の灌頂を受けている。さらに最澄は、弟子たちを高尾山寺に残して空海から密教を学ばせている。

乙訓寺

弘仁7年（816）に嵯峨天皇から高野山に真言密教の山岳道場をつくる勅許を得ると、弘仁9年（818）からは自ら高野山に入り悪鬼を駆逐し善神に守護を願う結界の儀式を取り行っている。この時、鎮守の神として丹生明神（丹生都比売大神）を祀っている。講堂を中心に東西に塔を配した金剛峯寺の建立に着手するが、在世中に完成することはなかった。

弘仁11年（820）に内供奉十禅師に任用されると、弘仁12年（821）には朝廷に讃岐の満濃池修築を命じられている。この池は周囲20㎞にも及ぶ堰き止め池であるが、堤防がその水圧に耐え切れず決壊を繰り返していた。空海はここに3か月ほどでアーチ型の堤防を築きあげている。この時空海がこの池で決壊を起していた龍を調伏するために護摩修法を行った小島が今も残っている。

このような社会活動の功績も加味され、弘仁13年（822）には東大寺に真言院（灌頂道場）建立が許可された。また弘仁14年（823）に東寺の管理を任せられると教王護国寺に改名し、翌年天長元年（824）から薬師如来を祀る金堂の他に密教の諸仏を祀る講堂と五重塔の建設に着手した。寺の鎮守の神として稲荷神社を祀っている。さらに真言僧50人が専住することが認められたことから、東寺は空海の真言密教の拠点となる。また最澄が弘仁13年（822）に死去したこともあり、天長元年（824）に高尾山寺が和気氏から空海に与えられると、これを神護国祚真言寺（神護寺）に改称している。この年には淳和天皇の勅により神泉苑で祈雨の修法も行っている。空海の代表的著作である『即身成仏義』『声学実相義』『吽字義』などが書かれたのもこの頃である。

西北より金堂、講堂、五重塔を眺む

東寺

また、空海は天長5年（828）に東寺の東隣に綜芸種智院を開設している。ここは仏教だけではなく、儒教と道教も教える日本初の私立の総合学問所である。身分や経済力に関係なく誰もが学ぶことができ、講師だけではなく学生の生活も保障されていた[10]。

---

9 、桓武天皇同母弟。皇太弟であったが、藤原種継暗殺関与の罪をきせられ、絶食して死去。
10 、空海の死後、承和14年（847）に東寺での伝法会法要資金を調達するために売却された。

承和元年（834）に東寺に三鋼[11]を置くことが勅許され、これにより東寺は正式に真言寺院となり、宮中にも真言院が設けられている。承和 2 年（835）1 月には真言宗に年分度者 3 人[12]が認められ、これにより真言宗は南都六宗・天台宗とともに公認八宗の一つとなった。2 月には金剛峯寺が常額寺となった翌月、空海は 62 歳で死去している。

金剛峯寺

古い記録では荼毘にふされたと記されているが、延喜 21 年（921）に醍醐天皇に大師号を申請した観賢（853－925）は、大師号宣下の勅書を携えて高野山に登り空海の遺骸を収めた石室の扉を開けたところ、入定の姿のままであったという。、そこで坐禅をしている空海の伸びた髪や髭を剃り、勅賜の衣に改め、礼をなして退去した。この時弟子の淳祐（890-953）が大師の膝に触れたところ温かかったという。これにより康保 5 年（968）に書かれた『金剛峯寺建立修行縁起』では死を意味する「入滅」ではなく、生きたまま禅定に入ったことを意味する「入定」という言葉が使われるようになった。治安 3 年（1023）に高野山を参詣した藤原道長は生きた空海に出会ったと日記に記している。『梁塵秘抄』には「大師の住所はどこどこぞ　伝教・慈覚は比叡の山　横河の御廟とか、智証大師は三井寺にな、弘法大師は高野の御山にまだおはします」とある。金剛峯寺では、今でも毎年 3 月 21 日に新しい法衣を御廟に奉献する「御衣替」の儀式が行われている。また、空海の遺言に、死後に弥勒菩薩が住む兜率天に昇ると書かれていたことから、空海を弥勒菩薩と同一視するようになり、高野山そのものを兜率天とする信仰も生まれた。

２、空海の思想

空海が 24 歳の時に書いた『三教指帰』は、蛭牙公子、兎角公、亀毛先生、虚亡隠士、仮名乞児の五名が討論する形式の寓話的な物語である。儒家の亀毛先生を道家の虚亡隠士が論破し、その道家を仏者の仮名乞児が論破することで、仏教の教えが最も優れていることを主張している日本最初の比較思想論的な著作である。日本に仏教が伝来して以来、仏教は最先端の孝養の一つとして道教や儒教と区別することなく受け止められてきたが、空海はこれを明確に別の思想であると区別したのである。

空海は『即身成仏義』で「加持」を、大日如来の神変が衆生の心水に映ることが「加」（大悲）であり、衆生の心水が大日如来の神変を受けとめることが「持」（信心）であるとしており、これを身口意の三密（一般仏教では三業）によって「三密加持」を行うことが密教の教義であるとしている。身による加持とは手に印をむすぶことであり、口による加持とは真言を唱えることであり、

---

[11] 、上座（寺衆を統率）、寺主（堂塔を管理）、都維那（日常業務の指揮）の三役。寺主と都維那には空海の親戚を当てている。実弟の真雅など空海門弟には親族も多い。

[12] 、『金剛頂経』を学ぶ金剛頂業『大日経』を学ぶ胎蔵業、梵字悉曇を学ぶ声明業を専攻した。

意による加持とは意識を仏に向け念じることである。この状態で行う修法が「祈祷」であり、修法の一つが「護摩」である。「加持祈祷」によって人が仏と一つになることを「即身成仏」という。また『弁顕密二教論』で仏教を顕教と密教に分けたのも空海である。

３、空海の直弟子たち

空海の死後、真言密教を主導していったのは空海の弟子たちではなく天台宗の円仁や円珍であった。貞観 8 年（866）に清和天皇は最澄に伝教大師、円仁に慈覚大師の諡号をおくっているが、空海に弘法大師の諡号が与えられたのは、その 55 年後の延喜 21 年（921）である。諡号宣下は朝廷が行うが、これは法弟からの奏請によってなされるものであることから、このことは真言宗に力がなかったことを意味している。

真雅による『本朝真言宗伝法阿闍梨師資付法次第の事』によれば、空海の法を託されたのは次の 10 人となっている（空海十大弟子）。

● 実慧（786-847）　空海と同じ讃岐の佐伯氏出身とされている。大安寺にいたが、空海帰国後に弟子となり、高雄山寺三鋼設置の際に摩々帝（寺主）に配されている。高野山開山に尽力し天長９年（832）には東寺一ノ長者となっている。空海没後には弟子の円行が入唐した際、青龍寺に進物と手紙を届けさせている。入唐僧の恵運や真紹など有力な弟子が多い。空海の後の第 2 の阿闍梨とされている。

● 真済（800-860）　紀氏出身で、若くして空海の下で出家し、25 歳で伝法阿闍梨となり、天長９年（832）には空海から神護寺を任され、宮中の真言院も主管している。また、空海から授けられた密教の奥義を要約した『高尾口訣』や、空海の漢詩文を集めた『性霊集』を残している。

● 真雅（801-879）　空海より 27 歳年下の実弟。東大寺真言院と弘福寺（川原寺）を任され、ている。真言宗の法統血脈では第二祖となっている。

● 道雄（？-851）　空海と同じ讃岐の佐伯氏出身。東大寺華厳宗七世であったが空海に師事し、京都に海印寺を建立している。

● 円明（？-861）　三論を学んだ後、空海に師事し、後に東大寺別当となっている。

● 真如（？-865 以後）　平城天皇の皇子高丘親王が薬子の変により廃され出家した。東寺で阿闍梨となった後に空海に師事。空海没後に密教の教えを求めて貞観 4 年（862）に入唐するが、唐ではすでに密教が廃れていたため、さらにインドへ向かうもマレー半島南部の羅越国でトラに襲われて死去したとされている。

● 杲隣（767-？）　東大寺で学んだ後、空海に師事。高野山修禅院、伊豆修善寺、京都修学寺を建立している。

● 泰範（778-？）　元最澄の愛弟子であったが空海に師事するようになった。

● 智泉（789-825）　空海の姉の子で、大安寺で学んだ後、空海の入唐に随行している。37 歳で死去。

● 忠延（？-837）　東大寺で授戒した後、空海に師事。

天長元年、高雄山寺が定額寺となった際、21 人の僧を置いたが、弘法大師伝とされる裏書にその 21 名と思われる名が書かれている[13]。また、承和元年（834）に金剛峯寺を任されたのは空海の甥である真然（804-891）であった。他にも真円（不詳）は天長４年橘寺で道雄と共に真言宗を代表して講義を行っている。これら多くの弟子たちがいたにもかかわらず、天台宗に密教の地位を奪われたのは、傑出した弟子がいなかったことと同時に、東寺・金剛峯寺・高雄山寺・東大寺に勢力が分かれ互いにけん制し合ったたことが原因である。

４、真言宗内の対立

まず、真済と実弟の真雅が政治的な対立をおこす。

真済は生え抜きの弟子として空海に代わり宮中との折衝を任され、真言宗で初めて僧正に任じられたほど文徳（もんとく）天皇からの信任を受けていた。そして、紀氏出身であったことから、母親が紀名虎（きのなとら）の娘であった文徳天皇の第一皇子惟喬（これたか）親王の護持僧となった。一方の真雅は藤原良房に接近し宗勢維持を図り、藤原良房の孫である文徳天皇の第四皇子惟仁（これひと）親王と懇意になった。

文徳天皇は皇太子として惟仁親王（後の清和天皇）を立てた後に、惟仁親王が成人に達するまでの間は惟喬親王に皇位を継承させようとしたが、藤原良房の反対を危惧した源信の諫言により実現しなかったといわれている。この皇太子継承問題の時に、藤原良房と惟高親王の祖父である紀名虎が、それぞれ真雅と真済とに修法を行わせた、あるいは二人に相撲を取らせて決着をつけさせたという伝説が残っている。惟仁親王が清和天皇に即位した後に、真雅は天台宗の円珍とともに厚遇をうけて僧正となる一方、真済は空海に関する書物を残したものの教団内では力を失っていった。

金剛峯寺と東寺も対立することになる。

実慧は真言宗の根本道場である東寺を任され、その第一世長者となった。その弟子の宗叡（しゅうえい）（809-884）は、延暦寺で天台宗と東密を学び、貞観 4 年（862）に真如法親王とともに唐へ渡り、五台山・天台山を巡礼し、汴州の玄慶、長安の法全などから密教を学ぶと、貞観 7 年（865）に帰国し、東大寺別当・東寺二長者などを歴任し、清和天皇が出家する際にはその戒師も務めるなど、実質的に真言宗を代表する者となり、東寺が真言宗の中心となっていた。一方、真雅の弟子の真然は空海の甥で、空海の死後、荒廃しつつあった空海の廟所でもある金剛峯寺の復興を試みた。

真言宗の年分度者は空海の奏請により、承和 3 年（835）に 3 人認可された際は、試験である課試と得度はともに金剛峯寺で行われていた。仁寿 3 年（853）には真済の要望により年分度者が 6 人とると、課試は東寺で行い、得度は金剛峯寺と神護寺で 3 人ずつ行うことになるが、次第に全員の得度も東寺で行われるようになる。これに危機感を抱いた真然は、元慶 6 年（882）に金剛峯寺の僧を年分度者とするように申請し、同 8 年には課試・得度ともに金剛峯寺で行うこととなる。これにより、東寺は年分度者とは関わることができなくなってしまった。

---

[13] 、一登・真雅・円明・智泉・慧運・忠延・真日・真光・康秀・浄行・円行・延証・真房・真勇・真元・真法・如行・載皎・慶喜・慧証・真愷

さらに、空海が入唐の際に写得した経文儀軌[14]の冊子である『三十帖策子』は門外不出の宗宝として東寺に納められていたが、東寺大経蔵を主管していた真雅が没した後、真然はこれを真雅が管理していたものであるとして高野山に持って行ってしまった。東寺は度々返却を求めたがかなえられず、後に観賢に時にようやく宇多法皇の助力により返却された[15]。

５、仁和寺と醍醐寺の台頭

真言宗の勢力を挽回したのが、宗叡の弟子益信（827－906）と真然の弟子聖宝（832-909）であった。

仁和寺

益信は紀氏出身で、大安寺で法相を学んだ後に宗叡・源仁[16]（818-887）から東密を学んでいる。宗叡の没後、東寺長者を金剛峯寺の真然が兼務したため東寺は廃れていったが、寛平４年（892）に益信が一ノ長者となると、宇多天皇に近づき次第に東寺は南北の諸寺を圧するようになる。昌泰２年（899）に宇多天皇は仁和寺で出家すると宇多法皇（寛平法皇）となり、延喜４年（904）には仁和寺に円堂院と御室を造りここに移り住んだ。元々、仁和寺は光孝天皇を供養するために仁和４年（888）に建立された御願寺であり、台密の影響下にあったが、これ以降は益信の法流によって伝承されることになる。仁和寺は、後白河天皇の皇子である第六世守覚法親王（1150－1202）の時には日本総法務の宮として勢威を振るうことになる。

醍醐寺

聖宝（832－909）は光仁天皇の末裔ではあるが、讃岐塩飽島に母親が流罪になっている時に生まれたとされている。大安寺・元興寺で三論を学ぶと、東大寺に東南院をつくっている。その後、真雅・真然・源仁から東密を学んだことから、東南院は三論真言兼学の道場となり、南都密教の根本となった。東大寺は昼に仁王経を転読し、夜は真言を転念したという。このように元々の宗と密教を兼ね修める「顕密兼修」が南都諸寺の通例となっていった。元慶の初め（877 頃）に醍醐寺を草創すると、寛平２年（890）には貞観寺[17]座主となる。寛平６年に権律師、翌７年に東寺二ノ長者、延喜６年（906）には僧正となっている。延喜７年（907）に醍醐寺は勅願持となる。聖

---

14 、仏や菩薩を対象に行う儀式や祭祀の規定で、特に密教で重要視している。
15 、鎌倉時代の初めに守覚法親王が東寺から借り出し、現在は仁和寺が保管している。
16 、護命に法相宗、実慧に密教を学び、真雅や宗叡に灌頂を受けた。元慶２年（878）に内供奉十禅師に任じられ、仁和元年（885）には少僧都・東寺二長者になっている。
17 、仁寿１年（851)に惟仁親王加護のため，藤原良房が真雅に建立させた寺。当初は嘉祥寺西院と呼ばれたが、貞観４年（862)に貞観寺と改称し嘉祥寺より独立する。一時は本寺の嘉祥寺をしのぐ勢いを誇ったが、摂関家の衰退とともに廃れ、応仁の乱で廃寺となった。

宝が没した後にも、醍醐・朱雀・村上天皇によって醍醐寺の造営は進められ、仁和寺と共に東密の拠点となった。また、聖宝は寛平 7 年（895）に大峯山を開き山頂に殿舎を建てて如意輪像を安置したとされることから、修験道中興の祖といわれるようになる。このため、後に醍醐寺は東密系修験道（当山流）の本山となる。

このように、朝廷からの帰依を受けた醍醐寺・仁和寺などの御願寺が勢力を増したため、東寺と金剛峯寺の影響力は低下し、分裂状態はさらに進んでいった。これををまとめ上げたのが、讃岐の秦氏出身で真雅と聖宝の弟子であった観賢である。縁起 12 年（921）に東寺一ノ長者、昌泰年中（898－901）には仁和寺別当、延喜 18 年（918）には東大寺検校、同 19 年には醍醐寺座主、金剛峯寺検校となっている。これにより真言宗は東寺を中心とした教団に再編成されることになる。また、観賢はいわゆる「大師信仰」を作り上げた人物でもある。弘法大師という諡号は観賢の奏請によるものであり、空海の肖像画を東寺から高野山、さらに全国の真言宗寺院に安置させたのも彼である[18]。

しかし、観賢が東寺によって真言宗をまとめたことにより、金剛峯寺は再び荒廃することになる。金剛峯寺を再興したのは、真言宗系の僧のではなく、南都の子島寺真興[19]の弟子である長谷寺の定誉（957－1047、祈親、持経）であった。定誉によって献じられた祈親灯は今も金剛峯寺で灯し続けられている。

６、真言宗の細分化　―小野流と広沢流―

仁和寺と醍醐寺から小野流と広沢流が生まれ、さらに分流をしていく。

- 小野流　・・　聖宝の法流は、観賢・淳祐・元杲（914-995）と続き仁海（951－1046）にいたる。仁海は一條天皇の要請で雨を降らせたことから「雨僧正」と呼ばれた。仁海が醍醐寺の北にある山科小野に曼荼羅寺（後の随心院）をつくり住んでいたことから、この法流を小野流という。仁海の後を継いだ成尊（1012-1074）には多くの弟子がいたが、対立した義範（1023－1088）と範俊（1038-1112）が醍醐寺流と小野流に別れ、明算（1021-1106）は高野山の法流と小野流の秘奥を統一し中院流を興した。中院流は現在でも高野山唯一の法流である。義範の弟子の勝覚（1057-1129）は三宝院流の開祖となり定海（1074-1149）に継承されたが、弟子の聖賢（1083-1149）と賢覚（1080-1156）はそれぞれ新たに金剛王院流と理性院流を興している。これを醍醐三流という。また、範俊の後を継いだ厳覚の弟子である寛信（1084-1153）、宗意（1074-1148）、増俊（1084-1165）の 3 人はそれぞれ山科の 3 寺を拠点として、勧修寺流、安祥寺流、随心院流を樹立した。これを狭義の小野三流と呼び、醍醐三流と合わせて小野六流という。
- 広沢流　・・　宇多法皇の孫弟子で、血縁でも孫にあたる寛朝（？－998）は円融天皇御願の円

---

18 、最澄は「我が為に仏を作るなかれ、我が為に経を写すことなかれ、我が志を述べよ」との遺誡を残していたが、ほぼ同時期に、比叡山で良源が根本中堂に最澄の像を安置している。

19 、興福寺で法相を学び、法相と密教を融合させた。後に大和国高市郡の子島寺に入ったことからこの流派は子島流密教と呼ばれた。

融寺を建てるなどして宮中との関係を強化していった。仁和寺の西にある広沢池の西北に遍照寺を建立して住んでいたことから広沢大僧正[20]とため、この法流を広沢流という。この後、北院御室済信（954-1030）、大御室性信（1005-1085）によって公家と間に強固な関係を築いていった広沢流は、大北斗法[21]などの法験によって名を広めた成就院大僧正寛助（1057-1125）の時に最盛期を迎えたが、その弟子たちによって 6 流に分流した。白河天皇の皇子で高野御室とも呼ばれる覚法（1091-1153）は本流であることから御流という。仁和寺西院の信証（1088-1142）の西院流は仁和寺だけではなく東寺や高野山にも相承され、現在でも御修法の一つである。永厳（1075-1151）の保寿院流は大覚寺や石山寺を中心に現在も伝承されている。聖恵は華蔵院流、寛遍は忍辱山流をおこし、覚鑁（1095-1143）が開いたのが伝法院流である。この広沢六流と小野六流を合せて、野沢根本十二流という。

7、高野聖と覚鑁

10 世紀の頃から高野山の谷々に草案を建てて生活する聖がいたと思われるが、延久 5 年（1073）興福寺の別所である山城の小田原から迎接房教懐が入山し、密教と念仏を兼修する集団を作り上げた。これが高野聖の原型と思われる。阿弥陀如来根本陀羅尼という真言や「南無三身即一阿弥陀如来、南無弘法大師遍照金剛菩薩」という真言的な名号を称えていた。この影響を受けて覚鑁が登場する。

覚鑁は仁和寺成就院領であった肥前藤津庄の追補使[22]伊佐平次の子として生まれ、13 歳で仁和寺成就院寛助のもとに入り定尊について真言を学ぶと、翌年から興福寺で倶舎・唯識を学び、元永元年（1110）に得度授戒した。さらに東大寺東南院覚樹について華厳・三論を学び、20 歳の時に東大寺で具足戒を受けている。この後、高野山に登って秘印真言受けている。師の寛助が、かつて実慧が行っていた東寺の伝法会を仁和寺で 1 週間にわたって行ったことに倣い、高野山でも真然が行って以来途絶えていた伝法会を、保安 3 年（1222）秘密真言堂を造営して復興した。また、京都の真言各流の灌頂を受けることにより真言宗各派の統一を試みた。大治元年（1126）に紀伊国石手庄内に根来寺を、同 5 年には高野山に鳥羽上皇の祈願所として小伝法院を造るなどの実績をあげて、天承元年（1131）には大伝法院の建立許可を取り付けている。熊野系念仏聖阿波上人浄心房青蓮や中別所の大通房長智などの高野聖にも師事していたことから、個人的な念仏堂である密厳院も造っている。覚鑁は真言宗内の序列にも能力主義を取り入れたことから、検校の良

覚鑁

[20] 、真言宗で初の大僧正。
[21] 、天変地異や疫病、夭死などの災を除くために一字金輪北斗七星という曼荼羅を供養する、真言宗と天台宗寺門派で重視される秘法。
[22] 、律令制下の令外官の一つで、警察もしくは軍事的な官職。

禅ら二百余人が訴えをおこしたたが、鳥羽上皇の信任は厚く、長承 3 年（1134）には金剛峯寺・伝法院の両座主を兼ねるに至った。覚鑁に金剛峯寺座主の座を追われた醍醐寺の定海は、東寺の長者として反対勢力の中心的な存在となり、ついにこの年の末、金剛峯寺衆徒が高野山の覚鑁を襲撃したため、院僧 700 余人とともに根来寺へ逃れている。鳥羽上皇は覚鑁に高野山へ帰るようにとの院宣を出したがこれに従わなかったことで、鳥羽上皇との関係も薄れてしまった。後に弟子筋にあたる頼瑜（1226－1304）は高野山と決別し、覚鑁を宗祖として真義真言宗を開いている。

８、その後の高野山

高野山金剛峯寺が紀伊の一地方山寺から全国的な信仰を集める寺院に発展したのは平安時代後半になってからである。治安３年（1023）に藤原道長、永承３年（1048）に藤原頼道が高野山参詣を行って以来、摂関家や上皇、院の高野山参詣が相次ぎ行われた。その度に荘園の寄進も受けたことにより、認知度と共に経済的基盤も得ることになる。

嘉承 2 年（1107）に堀河天皇が 29 歳で死去した際に、元服時の毛髪を空海廟前に埋納された（『中右記』）。これが高野納髪の最初である。永暦元年（1160）に鳥羽法皇の寵愛を受けていた美福門院が死去すると、遺言により高野山の菩提心院に遺骨が納められている。これが高野納骨の最初となる。これ以降、高野山は巨大な墓所となっていき、現在は一の橋から空海の廟所である奥之院に至る約 4 ㎞は 10 万基以上の墓がある。これも高野山の貴重な財源となっている。一方の比叡山は、三代座主円仁が遺言として「この山上に諸人の廟を造るなかれ。ただ大師（最澄）の廟のみを留む。われ没する後、木を植えてその場所のしるしとせよ。後代もし高徳の人ありてしいて造立せば、われははなはだはずる所なり」と残しているため、最澄以外の廟所はない。

資料　日本密教の曼荼羅

曼荼羅とは、密教経典の思想内容を、主尊を中心に諸仏を配置する形式で示した図像である。ほとんどの密教経典が曼荼羅を説いているため、その種類は数百にのぼる。日本密教では、根本となる両界曼荼羅と、それ以外の別尊曼荼羅とに大別されている。両界曼荼羅（両部曼荼羅）とは、それぞれ『金剛頂経』と『大日経』に基づいて大日如来を中心に造形された「金剛界曼荼羅」「胎蔵曼荼羅」（大悲胎蔵曼荼羅、胎蔵界曼荼羅）である。別尊曼荼羅は、大日如来以外の尊像が中心のもので、国家鎮護、病気平癒など、特定の目的のための修法の本尊として用いられるもので、仏眼曼荼羅、一字金輪曼荼羅、尊勝曼荼羅、法華曼荼羅、宝楼閣曼荼羅、仁王経曼荼羅などがある。

金剛界曼荼羅

日本で一般的に用いられる金剛界曼荼羅は、『金剛頂経』に説かれる二十八種の曼荼羅のうち「金剛会品」の成身会（じょうじんえ）、三昧耶会（さまやえ）、微細会（みさいえ）、供養会、四印会、一印会、「降三世品」の降三世会（ごうさんぜえ）、降三世三昧耶会、『理趣経』の理趣会の九会（くえ）から成る。この九会で一幅の曼荼羅を構成する手法は日本密教独自の流儀で、チベット密教では行われない。

中心になる成身会は中尊の金剛界大日如来と、その東・南・西・北に阿閦如来・宝生如来・阿弥陀如来・不空成就如来を配置している（これを金剛界五仏、五智如来という）。各如来の東・南・西・北には四親近（ししんごん）菩薩という、それぞれの如来と関係の深い菩薩が配されている。

三昧耶会、微細会、供養会は成身会とほぼ同様の構成をもっており、四印会はそれをやや簡略化したもの、一印会は他の諸仏を省いて大日如来一尊で表したものである。理趣会は金剛薩埵を中尊として、欲望を擬人化した菩薩がこれを取り囲む。これは、欲望を単に煩悩として否定するのではなく悟りを求める心に昇華すべきだという『理趣経』の理念を図示したものである。 降三世会は仏菩薩が憤怒の姿を現したものとされ、代表して金剛薩埵が恐ろしい形相をした降三世明王の姿で描かれている。降三世三昧耶会は降三世会を三昧耶形で描いたものである。

四印会	一印会	理趣会
供養会	成身会	降三世会
微細会	三昧耶会	降三世 三昧耶会

金剛界曼荼羅は真理を論理的な側面、精神世界のものとして捉えていると考えられる。

大悲胎蔵曼荼羅

この曼荼羅は全部で 12 の「院」（区画）に分かれている。その中心に位置するのが「中台八葉院」であり、8 枚の花弁をもつ蓮の花の中央に胎蔵界大日如来が位置する。大日如来の周囲には宝幢（ほうどう）如来、開敷華王（かいふけおう）、無量寿、天鼓雷音（てんくらいおん）の 4 体の如来配し、更に普賢菩薩、文殊師利菩薩、観自在菩薩、慈氏菩薩の菩薩をその間に配して、合計 8 体が表される。中台八葉院の周囲には、遍知院、持明院、釈迦院、虚空蔵院、文殊院、蘇悉地（そしつじ）院、蓮華部院、地蔵院、金剛手院、除蓋障（じょがいしょう）院が、それぞれ同心円状にめぐり、これらすべてを囲む外周に外金剛部（げこんごうぶ）院（最外（さいげ）院）が位置する。これは、大日如来の抽象的な智慧が、現実世界において実践されるさまを表現するという。

さらに、図の中央部は大日如来の悟りの世界を表し、向かって左（方位では南）には聖観自在菩薩を主尊とする蓮華部院（観音院）、向かって右（方位では北）には金剛薩埵（さった）を主尊とする金剛手院（金剛部院。薩埵院）がある。蓮華部院は如来の「慈悲」を、金剛手院は如来の「智慧」を表すものとされている。

胎蔵曼荼羅は真理を実践的な側面、現象世界のものとして捉えると考えられる。